報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目	中世物語における女性像の研究 ―『我が身にたどる姫君』『新蔵人』『ちごいま』論―
氏　　名	鹿谷　祐子

論　文　内　容　の　要　旨

王朝物語の歴史は、『竹取物語』が成立した九世紀末に最初の峰々があり、『源氏物語』という燦然と輝く山巓を経て、稜線はゆるやかに下降すると考えられてきた。中世王朝物語やお伽草子は山並みの終わり近くに位置する。そのため、「擬古物語」と呼ばれ、独創性に乏しく、古い時代に及ばない作品というイメージを負わされることもあった。ところが、「中世王朝物語」という呼び方が提唱され、しだいに定着してきている。「擬古」にある「亜流」というイメージを払拭したこの呼称には、鎌倉時代以降の物語が追求した平安時代の物語とは異なる世界を、肯定し評価しようという力強さが感じられる。

中世王朝物語やお伽草子の作品世界を解明するにあたって、興味を持って取り組んでいるのは、密通の拒否や異性装といった、これらの作品が有する王朝物語のメインストリームから外れる部分、あるいは中世における王朝物語の享受・生産、絵本や絵巻での物語享受である。

【研究編】第一部では、中世王朝物語『我が身にたどる姫君』を対象に論じた。

第一章では、物語の前半で活躍する女三宮について考察した。『我が身にたどる姫君』には、多くの「密通」が描かれている。密通に苦しむ女性たちのなかでも、女三宮と一品宮は、密通をなんとか回避しようとしたり、それを人に知られないために、高貴な姫君らしから強情なふるまいをしたりする女君である。女三宮は、物語の前半における重要な登場人物でありながら、これまであまり研究されることがなかった。「岩木」「奥の夷」などの言葉を手がかりに一品宮と対比しながら、その人物像や役割について検討を加えた。

第二章では、時の帝と皇太后宮の相次ぐ非業の死、という巻七の悲劇がなぜ引き起こされたかについて考えた。一品宮の未婚のままの立后には、「皇后宮の系譜」と「中宮の系譜」のバランスを取る措置、という意味合いがあったはずである。しかし、こ

れが密通の引き金となり、一品宮は「密通」という方法で契りを結ばれたことを決して許さず、息を引き取ってしまう。このような強情さの背景には、「一品宮」という立場が持つイメージと、「不婚内親王の立后」にまつわる暗黙の了解があったのではないか。それらをもとに、『我が身にたどる姫君』全体がどのように読めるかという見通しを示したものである。

第二部では、お伽草子『新蔵人』および『ちごいま』を取り上げた。

『新蔵人』について、引き歌や女人成仏などの観点から研究が進められているが、男装の姫君というモチーフは、やはり大きな論点であろう。『新蔵人』以前に男装の姫君が活躍する作品として、『とりかへばや』と『有明の別れ』がある。新蔵人の人物像は、先行作品とはどのように異なっているのか。また、『新蔵人』はどのような結末に至るのか。第一章では、「化け化けし」という新蔵人の性質を象徴するキーワードに焦点を当て、室町時代の男装の姫君の物語として『新蔵人』について論じた。

第二章から第四章において考察の対象とする『ちごいま』は、注釈書などが公刊されていない、情報の少ない作品である。そのため、まず、第二章で『ちごいま』の書誌や成立・作者、梗概などを示し、作品の全体像を把握した。『ちごいま』の物語世界は、詞書と絵、画中詞をあわせて完成する。それらは相互に補い合っているが、画中詞によって滑稽さが演出されることもあり、物語世界に深みと奥行きを与えている。詞書と絵、画中詞について気づいた点を述べ、あわせて諸本を比較し、伝本ごとの特徴についても言及した。

第三章と第四章では、稚児と姫君の恋と受難に焦点を当て、『ちごいま』と『源氏物語』とのかかわりについて論じていった。『ちごいま』は、『とりかへばや』や『秋の夜の長物語』など、さまざまな作品の方法を摂取し、豊かな世界を作り上げてきたが、最も大きな影響を与えたのは『源氏物語』だからである。

第三章では、『ちごいま』と先行物語とのかかわりを網羅的に取り上げながら、垣間見場面の表現に着目し、稚児と姫君の恋が『源氏物語』の柏木と女三宮の物語をモデルとしていることを指摘した。柏木の物語は悲恋に終わるが、稚児は幸福な結末にたどり着く。生まれた子を寿ぐ場面を通して、『ちごいま』が『源氏物語』から離脱する方法を探った。

第四章では、稚児と姫君の受難について考察した。それは浮舟のイメージを援用しながら描き出されており、女性である姫君ばかりではなく、男性である稚児にも当てはまるものである。『源氏物語』原典とともに、梗概書を視野に入れながら論じ、特に、奈良絵本において『源氏物語』の影響が顕著であることを示した。また、女房たちが『源氏物語』を読むという行為について検討し、女性史の暗黒時代と考えられてきた中近世において、『ちごいま』が女性教育の証左となることを述べた。

第三部は、西尾市岩瀬文庫に所蔵されている奈良絵本・絵巻の書誌学的研究である。

平成19年8月11日より10月28日まで、岩瀬文庫特別展示「絵ものがたりファンタジア」が開催され、奈良絵本や絵巻の調査・撮影が行われた。その成果を踏まえた報告が基礎となっている。

第一章では『住吉物語』の奈良絵本（函番号111-84）について考える。『住吉物語』の古本は早くに散逸して伝わらない。現存本はすべて改作であり、その数は百を超える。改作末流本として考察の対象とされることが少なかった岩瀬本を対象に、大阪府立中之島図書館蔵奈良絵本零本や、大東急記念文庫蔵伝一位局筆本との関係を論じた。岩瀬本には、恋愛譚としての物語を盛り上げていこうとする傾向が現れている。そこに、同時代的な作品として『住吉物語』を発展させたという積極的な価値を見出したい。

第二章では、二種類の『西行物語』絵巻を取り上げ、論じた。『西行物語』の諸本は大きく四系統に分類され、岩瀬本はともに采女本系に属する。『西行物語』（函番号午-四九）は、采女本系の中でも国立国会図書館本（五巻）と非常に近い関係にあり、『西行絵詞』（函番号申 - 三八）は、版本の『西行四季物語』に近い祖本からの模写本ではないかと考えられる。また、画面から阿弥陀如来像が消えているという問題について、浄土真宗の影響を受けた可能性を指摘した。

【資料編】では、【研究編】第三部第一章の関連資料として、岩瀬文庫蔵奈良絵本『住吉物語』（函番号111-84）と、大阪府立中之島図書館蔵奈良絵本『住吉物語』（請求記号　甲和８０６＃）の翻刻を掲げた。

以上